



## 蘇州市へことじ灯籠贈る

—— 提携3周年記念事業 ——



(写真は蘇州市の東園に建ったことじ灯籠を背に記念撮影。左から江川市長、方前市長、段市長、末岡市議会議長)

金沢・蘇州両市の姉妹都市提携3周年を記念して、昨年6月蘇州市から1対の獅子像が贈られてきたのに対し、金沢市からは本市を代表する兼六園のことじ灯籠の複製を蘇州市へ贈呈した。大きさは兼六園のことじ灯籠と同じで高さ約2.7m、重さは短脚の台石を含め約7t、製作には約2ヶ月を要し8月中旬完成した。また、製作、運送費の約半分(70万円余)を市民の寄附に頼り、市民が主体となり、市民の協力のもと8月下旬名古屋港から船便で発送し、9月上旬上海港に陸揚げされ、蘇州市には9月末日に到着し、東園に設置された。このことじ灯籠の除幕式に出席するため蘇州市の招待を受けた江川市長夫妻、末岡本会会長(金沢市議会議長)夫妻ら一行6名の金沢市訪日友好代表团は昨年10月3日中国訪問の旅に出発した。同日夕方、上海空港から中国の最高級車「紅旗」に乗り蘇州市に着いた。ホテル(南園賓館)前には段市長、方前市長はじめ蘇州市の幹部多数が出迎え、一行は熱烈な歓迎を受けた。同日夜は

賓館内の蘇州市歓迎宴に臨み両市の友好談議に大いに花を咲かせた。翌4日午前、寒山寺、刺繍研究所を見学、午後2時賓館内で方明前蘇州市長へ、同氏の在職中の功績を称えて「金沢市特別名誉市民証(章)」の授与式が厳かに行われた。このあと、午後3時から、今回訪問の第1目的であることじ灯籠の贈呈、除幕式が多数の市民が見守るなか東園で盛大に行われた。設置場所は、昭和56年江川市長が訪蘇した際植えられた泰山木の近くの橋のたもとに据えられ、両市長が深紅の幕を除幕すると大きな拍手がおこり、両市の末永い友好のシンボルとして新たな一歩が刻まれた。また、同日夕、両市の来年度交流について話合いがなされ、技術交流団の派遣、受入れについて合意に達した。今回訪問の最大目的を終えた一行は、5日蘇州市から上海市へ移り、さらに桂林市、広州市を訪問、各市の人民政府の熱烈歓迎を受け、友好交流を深めることができた。10月10日広州市から汽車で香港に向かい、12日午後4時帰国した。

# 緊密な友好交流



## ようこそナンシー市長

ナンシー市のロッシノ市長、ブルーゼ・ジュルバン姉妹都市担当助役ら市幹部6名が昨年10月18日本市を訪れた。出張中の江川市長に代わり、尾戸助役、末岡本会会長（市議会議員）ら多数が市庁舎前に出迎え一行を歓迎した。ミス百万石から花束が贈られ、特別応接室「紅梅」で歓談した。一行は東京で開かれたフランス物産フェアに参加のため来日したもので、江川市長とは、前日、東京で会い友好を温めた。一行は、兼六園、加賀友禅工房などを見学。ロッシノ市長は18日夜、東京に戻ったが、他の5名は翌19日まで滞在して両市の友好を深めた。

（写真左は、ミス百万石から花束を受けるナンシー市長）

## 蘇州市友好代表団が来訪

昨年6月11日から16日まで蘇州市友好代表団一行5名（団長、方明蘇州市長）が来訪した。一行は11日午後金沢駅に到着、早速、江川市長、末岡本会会長（市議会議員）を表敬し、固い握手を交わして友情を確かめあった。13日午後本多公園で両市の友好締結3周年記念に蘇州市から贈られた獅子像の除幕式に出席、永遠の友情を誓った。翌14日は恒例の百万石パレードに参加、なじみのある多くの市民から温かい歓迎の拍手を受けた。同日晩、3周年記念市民歓迎会では250名を超える参加者と友好を深め合った。16日次の訪問地池田市へ向けて離沢した。

（写真右は、獅子像の前での記念撮影）



## 末岡会長ら姉妹都市を歴訪

末岡尚本会会長（市議会議員）と山本利夫市議会議員の2人が、昨年7月17日から8月4日にかけて、гент、ナンシー、パファロの各姉妹都市を訪問した。гентでは、ブーク担当助役の温かいもてなしを受けたが、丁度、ベルギー建国記念日でもあり街中がお祭り一色であった。ナンシーでは、ブルーゼ・ジュルバン担当助役ほか市幹部多数が一行を親しく迎え、レセプション等の歓待を受けた。パファロでは到着が日曜であったにもかかわらず、カーランド姉妹都市委員長、クーパー同委員などから手厚い出迎えを受ける等し各姉妹都市との友好を深めた。

（写真左は、パファロ市長を表敬する会長一行）





### гент市のカンタービレ合唱団が来訪

гент市からアマチュアのカンタービレ合唱団33名が昨年7月17日から18日まで本市を訪問した。一行は、長野市で開かれた国際合唱フェスティバルに参加の途次、立ち寄ったもので、さっそく市内堅町商店街で街頭コンサートを開き、市民らに美しいハーモニーを聴かせた。又、夜はカトリック広坂教会でコンサートを開き、古いヨーロッパの民謡やミサ曲、日本の民謡など16曲を披露した。金沢混声合唱団が共演し、歌の友好親善を深め合った。  
(写真左は、広坂教会でのコンサート風景から)

### ポルトアレグレ市のサッカーチームが来訪

ポルトアレグレに拠点を置く名門スポーツクラブ“インテルナシヨナル”から選ばれたユースチーム一行23名がアントニオ・サントス氏を団長に8月20日金沢に着いた。15才から18才までの精悍なブラジル選手17名は、翌21日市営競技場で開催の「日伯親善ユースサッカー'84金沢大会」に出場。チームはさすがプロを目指す予備軍だけに、対戦相手の県高校選抜チームを足技、連携プレーの妙技で9対0と下した。22日次の転戦地奈良へ向けて出発した。  
(写真右は、駅頭で市長、会長を囲んで)



### バイカル・アザラシ来たる

昨年7月22日、生後5ヶ月のバイカル・アザラシ4頭(雄1頭、雌3頭)が金沢水族館に到着した。このアザラシはバイカル湖のみに生息する世界でも類まれな淡水産で、これまで日本には12頭が飼育されているだけ。受入計画は、友好親善のあかしとして、金沢、イルクーツク両市長の仲介により、1年半がかりの折衝の結果実現にこぎつけたもの。一般公募によって愛称は、フリ、タロー、チビ、ラムちゃんとなづけられ、同館の人気者である。  
(写真左は、愛嬌をふりまくラムちゃん)



### 中川収入役夫妻がナンシー市を訪問

姉妹都市ナンシー市からイスラエルのキリアトシモナ市との提携調印式に出席して欲しいとの招請を受け、市長代理として中川三津夫収入役夫妻が昨年5月19日から21日までナンシーを訪問した。20日、市庁舎2階で調印式が行われ、又庁舎前広場では記念カーニバルも盛大に催された。同夫妻は、ブルーゼ・ジュルバン担当助役らの温かい歓待を受けて大いに両市の友好を深め、この後、ベルギーの姉妹都市гент市をも訪問し、親善を深めた。  
(写真右は、市庁舎2階でロツシノ市長と記念撮影)



### 蘇州市農業経済考察団が来訪

昨年10月24日から29日まで蘇州市農業経済考察団一行5名(団長、楊荷生副市長)が金沢を訪れた。一行の目的は、日本の農協の仕組み、農協と農家の関係、農産物の加工、専業、兼業農家の実態を考察することにあり、このため市庁舎内で総合的な講義を受けた。滞在中、一行は市農協、農家、専売公社、精米工場、味噌加工工場、市中央卸売市場を視察、更に折しも開催中の石川県農林漁業まつりを見学し、十分な成果をあげて、29日朝離沢した。  
(写真左は、中央市場で農産物の流通機構の説明を受ける一行)

# ヨーロッパの街で

## — ナンシー・гентを訪ねて —

金沢市収入役 中川 三津夫



姉妹都市ナンシーとгентを親善訪問するについて、大きな荷物を持ち歩く煩雑さを避け、パリのホテルに旅行用トランクを置き、鉄道を利用して2都市をそれぞれ往復した。

ホテルが市街の西方にあったため、駅への行き帰りは、必ずパリの中心街を通ることになったし、гентへの乗換駅ブラッセルの町も歩くことができた。

そうした往来の中で、おやつと思ったことがある。それは、町のいろいろな場所で“お早よう、”“ありがとう、”“どうぞ、”等々といったあいさつが、非常に数多く交わされることである。

ホテルでエレベーターに乗る。先客の見知らぬ人が会釈する。向こうがするから、こちらもお早よう、とあいさつを交わす。ビルのドアに人がいて、私たちが後から続いて来るのに気付くと、必ずドアを押さえて待っていてくれる。自然に“ありがとう、”というお礼の言葉が口をついて出る。それは、私たちが東洋人だからでも、観光客だからでもない。〈何かの御縁で〉たまたまそこに居合わせた人々が、ごく自然にしかも誰彼の差別なく振る舞う社会的慣習なのだ、ということに気付いた。

ナンシー市役所でのパーティーのとき、隣席に坐ることになった人は、“キャニュー・スピーク・イングリッシュ、”と呼びかけて来たり、フォール・サントノレ通りの靴屋の女主人やブラッセル駅の職員も、こちらが怪しげなフランス語でしゃべろうとすると、“英語で、”と気をつけてくれた。

歩き疲れて、歩道上に並べてあるカフェの椅子に坐り、コーヒーやビールを飲みながら、物珍しげに異国の街を眺めた。

そこには誰にも干渉されない自分たちだけの自由な空間と時間が存在する。

帰りに代金とチップをテーブルに置いて立ったら、白衣のギャルソンが日本語で“ドーモアリガト、”と送り出した。

ヨーロッパの街には、洗練された個人主義と民衆の間に通いあうぬくもりとが共存していて、そこに魅力があると感じた。



(写真は、гентの飴玉屋、カトリンさんの店先で)

### ギセップ・ニボラさん(26才)



### ピエール・アブランさん(28才)



## \*\*\*プロフィール\*\*\*

姉妹都市ナンシーから6人目の交換留学生がやって来た。ギセップ・ニボラ君がその人で、国立ナンシー美術学校美術科で油絵と彫版複写を専攻する3年生である。ニボラ君が金沢に着いたのは59年7月16日、翌日早速、留学先の金沢美術工芸大学美術学科油画専攻の教室に通い始めた。芸術の国フランスからやって来た若い画学生だけに、日本の文化芸術に対しても強い興味を惹かれるらしく、時間を割いては陶芸にチャレンジしたり、県内各地の祭り見物に精を出している。また、市内小立野の市民宅に下宿し、日本人の生活様式に慣れ親しんでいる。勉学期間は本年3月末迄で、残りの月日を有効に使おうと張り切っているこの頃である。

一方、昨夏8月12日、ナンシーから初の医学留学生が到着した。ピエール・アブラン君、ナンシー第1大学医学部麻酔学専門課程の第3学年に在籍するヤングな医学生である。アブラン君の留学の動機は、日本の麻酔学の最先端を学ぶことにあり、金沢ライオンズクラブのスポンサーを得て金沢大学に留学が実現したもの。ナンシー大学医学部では博士号取得のための論文作業を進めており、このため金沢大学医学部の麻酔学講座では村上誠一教授指導のもと、当面の研究テーマを「外科手術後のニトログリセリンの使用効果、麻酔薬の比較使用」等に絞って治療ケースの研鑽を積んでいる。留学は本年4月一杯である。

### — 編集後記 —

昭和59年度に当委員会が受入れした来訪者は、姉妹都市からも含めて1,250余人に達します。その一つ一つは紙幅の都合で全部は掲載できませんでしたが、国際交流は年々確実に増大の一途をたどっております。事務局も一丸となって頑張っておりますので、本会へのご意見・ご要望をお寄せいただけましたら幸いです。